第 106 回　17・18 世紀のヨーロッパ思想①

1　17・18 世紀のヨーロッパにおける政治思想

・17・18 世紀のヨーロッパにおける政治思想としては、絶対王政を背景として、それを正当化する（　　）があった。
・また、人民の契約によって国家が成立するという（　　）が自然法思想から発展し、絶対王政を批判する市民階級の政治思想となっていった。

＜王権神授説＞

フィルマー　　…イギリスのチャールズ１世に仕え、王権神授説を唱えた。
（　　）…フランスで王権神授説を唱え、アンリ４世に影響を与えた。
（　　）…フランスのルイ 14 世に仕え、王権神授説を唱えた。

ボーダン

ユグノー戦争中には、宗教の寛容を主張していた。
その割には魔女狩りを狂信的におしすすめ、多くの無実の人を殺した。

ボシュエ

ルイ 14 世に仕え、王子の教育係も務めた。本職は聖職者（パリの大司教）であり、聖書の言葉から、王権の絶対性を主張した。

ルイ 14 世

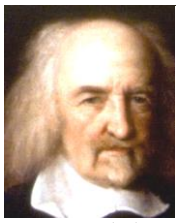
Mr.絶対王政。「朕は国家なり」の言葉はダテじゃないが、戦争のやりすぎは、子孫に重荷を背負わせ、フランス革命の伏線となった。

＜社会契約説＞

（　　）…イギリスの思想家。著書『　　』。
ピューリタン革命の混乱の中で、「人間は自然権を持っているが、個人個人がそれを主張した場合（　　）状態になる」と説いた。
→混乱を避けるため、人民は契約により統治者に自然権を預けて国家が成立。
→社会契約説の立場から統治を正当化し、絶対王政を擁護した。

（　　）…イギリスの思想家、哲学者。著書『　　』。
「人間は自然状態でも平和に暮らし、生まれつき生存権や財産権を持っている」
→これらの権利を守るため人民が契約を結び国家が成立。
→統治者が権利を侵害した場合は反抗してもよいとする（　　）を説き、名誉革命を正当化した。

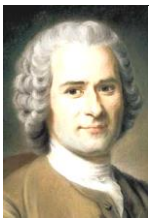
（　　）…18 世紀半ばのフランスの啓蒙思想家。
著書『　　』、『　　』。
人間の自由と平等を主張し、「主権は統治者ではなく人民にある」と説いた。
→絶対王政や立憲君主政を非難し、直接民主政による人民主権を主張。


ホッブズ

社会契約の際、人民は統治者に対して、「自然権（ここでは生存権）を譲渡した」と考えた。そのため、人民は統治者に服従しなければならないとした。

ロック

ロックは、名誉革命の際に国王と一緒にオランダから帰国している。啓蒙思想、「アメリカ独立宣言」、フランスの「人権宣言」にも大きな影響を与えた。


ルソー

彼の思想はフランス革命にも大きな影響を与えたが、性格は完全に変態である。極度のマゾで、露出狂でもあった。知的障害者を愛人とし、生まれた子供5人は、孤児院に捨てた。

2　自然法思想

グロティウス
早熟の天才であり、11 歳で大学生、15 歳で外交官、16 歳で弁護士となった。

・（　　）とは、時代や地域を越えて通用する法であり、後に「人間が生まれながらにして持っている権利を保障する法」と考えられるようになった。
→この自然法を基礎として、国際法が発展していった。

・17 世紀、オランダの法学者で外交官の（　　）は、貿易や航海の自由を主張して『　　』を書いた。
→海洋に関する国際法のもととなった。
・また三十年戦争の惨禍を見て、『　　』を書いた。
→国際法の基礎を確立し、「　　」「　　」とされた。

3　啓蒙思想

・17 世紀の科学革命や自然法思想を受けて、18 世紀には人間の理性を重んじ、伝統的な迷信・慣習・不合理な社会制度を批判する（　　）が広まった。
→絶対王政や教会支配に対して抵抗する人たちに、大きな影響を与えた。
・このような思想は、書籍や新聞の形で出版され、（　　）やカフェ（コーヒーハウス）で自由に語られることで世論の形成をうながした。

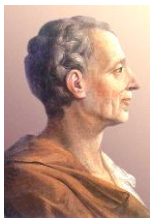
（　　）…フランス人で、イギリス亡命中にロックなどの思想にふれて、帰国後は代表的な啓蒙思想家となった。
プロイセンの（　　）やロシアのエカチェリーナ２世との親交が有名。著書『　　』。

（　　）…フランスの啓蒙思想家。ロックの影響を受け、国王の権力を抑えるため（　　）を主張した。
著書『　　』、『ペルシア人の手紙』。

（　　）と（　　）
…ともにフランスの啓蒙思想家で、『　　』という百科事典を編集した。

ヴォルテール

受験では、「フリードリヒ大王との親交」ばかりが問われるが、『哲学書簡』は、コラムのようで普通におもしろい。なおヴォルテールというのは、本名をもじったペンネームである。



モンテスキュー

もともと三権分立とは、絶対王政に対して、貴族の特権を守っていこうという思想であった。彼ももちろん貴族。

ディドロ

ダランベール

総執筆者は、184 人であり、執筆者は百科全書派と呼ばれた。
ディドロはロシアのエカチェリーナ２世と親交があったことでも知られる。

ジョフラン夫人のサロン

18 世紀のフランスでは、貴族や裕福な市民の女性たちが、サロンと呼ばれる社交の場を開いていた。
サロンやカフェに啓蒙思想家や学者が集まり、知的な会話を楽しんだ。この絵の中に、ディドロ、モンテスキュー、ルソー、ケネーなどもいる。この自由な雰囲気が、フランス革命の思想を育てた。